

初 心

下川雅嗣

今年は私にとって上智大学で専任として教えた初めての年でした。当然ゼミをやったのも初めてですので、皆さんはゼミ第一期生ということになります。私は上智出身でないし、もっと言うならば私の出身学部は工学部だったので、そもそも文系のゼミが何をやるのかというイメージさえありませんでした。よってすべてが手探り状態で、皆さんに迷惑をかけた面も多々あると思いますけど、一方で私自身は新鮮かつ真剣だったし、皆さんの提案を出来るだけ聞いたつもり（聞かないと何もわからない）ですので、一期生は得した部分も多々あったのではと願っています。実際に皆さんに言われるがままに、本ゼミと別にサブゼミが二つ発生し、それぞれのゼミで言われるがままに合宿なども行い、飲み会などもなんかいっぱいあったような気がします。そうそう、このゼミ論集も最初はまったく思いつきもしないことで、皆さんに言われてこんなことになりました。よって最初から計画したわけではないので、もう論文は終わって解放されたと思った頃（人によっては日本から脱出した後）に突然、感想・要約そして全文の電子データを出せと言われ、随分困った方々もおられたのではないかと心配しています（なお、このゼミ論集は一部体裁が整っていない部分もありますが、それはこのような事情からですので、その旨ご理解ください）。私にとってもこのゼミ論集は誤算でした。ゼミ論集を作るという提案が出たときには安易にOKしたのですが、「ゼミ論集には先生のはじめの一言がある」と言われたときには「ヤバっ！！！」と思いました。私は文を書くのが（ついでに言うと本を読むのも）とても苦手なのです。私が大学（文系）にいること自体間違っているのかもしれませんが。こんな文さえ私にはプレッシャーなので、以降あまり期待せず読んでください。とにかくこのように、学生の言われるままにすべてやっていたら、身が持たないという気も。。でも私もとても楽しかったです。ありがとうございました。

さて、何を書こうかということでも迷ったのですが、今年が専任として大学で教育・研究に携わった最初の年なので初心を書こうかと思います。これを私の分かち合いとして皆さんにも知っていただきたいし、将来の自分のためにもこれを書きとめておくことは大事かもしれないと思ったからです。初心は三つあります。

第一に、私にとって大学、学問、研究とは何かということです。よく大学は象牙の塔と批判的に言われますが、どちらかと言うと私もそんな印象を強く持っていました。しかしうろ覚えで申し訳ないのですが、エルサルバドルに中米大学というのがあって、その大学のソプリノという先生の話聞いてイメージが少し変わりました。多くの皆さんがご存知のように、エルサルバドルの民衆が政府・軍の抑圧下に置かれていたときに、もともと

中米大学はどちらかと言うとその現実には直面せずに体制側の立場に立ち、教育・研究活動をやっていたそうです。ところが、十数年前に大学そのものの方向性を皆で変えようという選りをしたのだそうです。どういう選りかと言うと、「学問というものはどんな学問でも社会をより良くするために資するものはずである。特に、具体的に多くの民衆・貧困者が抑圧され、殺されている社会においては、例外なく一人一人が大切にされる社会を構築するために資するものでないといけないのではないか。そして大学というのは、社会をよりよく変えていくという社会変革のための一つの社会勢力のはずだ。これまでこの抑圧と貧困の現実から逃げていたので、これからは貧困者に資する学問、大学に変わる」と言ったものです。その結果、軍の襲撃を受けて先生たちは何人も殺されたのですけど。。もちろんエルサルバドルの社会と日本の社会とではまったく違うでしょうけれど、日本にも貧困の現実は見えにくいけど存在するし、日本の社会にもいろいろな意味での社会の歪みや闇は存在しています。また私たちがアジア人、さらには世界市民だとするならば、アジア、そして世界には多くの貧困と抑圧の現実があるわけです。それら貧困者に資する、または社会の闇に直面しその中の光を見出し、社会をよりよいものに変革していくための学問、研究、大学のあり方の追求というのは私にとって大切な課題です。

第二は、現場の重要性についてです。私にとっては上記のような道を追求しようとするときにそのような現場に身を置くこと、さらには自分が日常感覚として貧困者、社会の歪みの中にいる人々と一緒に歩んでいるのは重要なことだと思います。これについては何も学問の道に限らず自分の生き様として重要で、自分が身を置いている場所と誰とともに歩んでいるかによって見える現実が違ってくるのだと思います。私にとってこれについては過去の痛い体験がありました。実は昔、ある中央官庁で国の新政策を考えたり、予算を作成したり、法律を改正したりといった仕事をしていたことがありました。そもそもその官庁に入るときの初心では社会をより良いものにかえていきたい、特に社会のいろんな闇的な現実を変えていきたいと純粋に考えていました。しかしながら、役所の仕事に忙しさの中で(1ヶ月泊り込みというのもあった)いつしか社会の歪み・闇の中にいる人たちと接する機会を失い、そうしているうちに机上の文書と新聞だけで新政策を考えるようになり、その結果同じ現実も違ったように見えてきました。それだけでなくいつしか私の心の奥深いところの考えが偏向してしまいました。初心を忘れて自分がその官庁で偉くなること、パワーを持つことだけを考えるようになっていたのです。もちろん表面的にはその当時も社会の歪みを変えるというようなことを言っていたし、考えていたと思いますが。。人間は環境に左右されるつくづく弱い存在であることを痛感しました。実際に苦しい状況にある人と共にいない限りすぐに心の方向性はずれ、同時に考えも現実離れしたことを考え、おそらくそのような人がパワーを持つことは貧困者、社会の闇にいる人にとってかえって害悪をもたらすことになるのでしょう。なお、このときにはその官庁に入る前に仲の良い友達数人に初心を語り、「その初心から根本的にずれてきたら、無理やりそこから引きずり

だしてくれ」と頼んでいたおかげでそれに気づけたわけです。

そして今の大学での教育・研究にもまったく同じことが言えると思います。もし私が貧困なり社会の闇的現場に身をおかず、そこにいる人たちと共に歩んでいるという感覚を失ったら、きっと彼らにとってかえって害となる教育や研究をする危険をはらんでいるのです。だからこそ現場を大事にしたいと思っています。

第三は、例外なくすべての人が持っているはずの可能性への信頼です。今回のゼミ論でも何人かの人は開発や援助をテーマとした論文を書きました。その中で、多くの人が現地の人々を大事にした援助が大切だと書いていると思います。これは具体的にどのようなことなのでしょう。最近タイに行ったとき、いろんな人から面白い話を聞きました。その中で印象に残っていることをまとめると、「貧困者は（社会的、政治的、経済的領域において）自分達のスペースさえあれば、本来自分たちで歩み、自分たちの将来を築いていく力を持っている（その際、根本的にはコミュニティーが重要になる）。よって国であろうがNGOであろうが、貧困の中にいない外部者の役割は、貧困者のスペースを創り、それを広げる手伝いをするだけだ。そしてそのようなスペースを繋いでいくことも外部者の役割であり、これによって民衆の歩み（People's Process）での発展が実現できる。NGO やら国際機関のプロジェクトの場合は往々にして民衆の歩みではないことが多いので、ある地域でプロジェクトが行われてもなかなかその外には広がっていかない。しかし民衆自身の歩みの場合は、それが国全体、そして国を越えて広がっていく。このときはじめて社会変革への道が開けてくる」と言ったような感じです。私自身、現在最も関心のある研究テーマは、どうやって貧困者のスペースを創り、広げていけるのか、民衆の歩みはどうやったら発展するのか、全世界にそのようなプロセスはどのように生じているのか、またそれを妨げているものは何か、というようなところです。

なお、ここに書いてあることは実は貧困者に限らず、例えば皆さんの学生に関わる関わり方、また他のすべての人に関わる関わり方にも通じるような気がしています。特に学部において私が皆さんに対してやっていきたいことは、皆さん一人一人が自分の足で歩みだすためのスペースをつくるお手伝いではないかと思っています。あとは皆さんが自分の足で歩みだすと言うのが理想です。

以上、私のありのままなのでけっこう恥ずかしさを感じながら、初心を書いてみました。私の分かち合いがなんらか皆さんのこれからの人生に役に立ってくれたら嬉しいという気持ちも持ちながら。。。。また、ここに書いたことは私がやっていることではなく、私が初心として望んでいることで、実はどれも私にとっては難しいことだし、場合によっては苦手なことなのです。だからこそ、こうやって意識しているわけです。果たして5年後、10年後にこれを読み直してみて、そのときの自分がどんな状態にいるのかまったく自信がありません。二つ目のお話で、いつのまにか初心を失っていたときに、私の幾人かの友人

がその状態から引きずり出してくれたように、私が将来この初心を失ってしまっていたら
これを読んだゼミ生がいつか引きずりだしてくれることを少しくらい期待しながら。。